

新約聖書 マタイによる福音書 11章 12節—19節（新共同訳）

¹² 彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている。¹³ すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。¹⁴ あなたがたが認めようとすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。¹⁵ 耳のある者は聞きなさい。

¹⁶ 今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。¹⁷ 『笛を吹いたのに、／踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、／悲しんでくれなかった。』

¹⁸ ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、¹⁹ 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。」

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

説教「正しさ」

本日は宗教改革主日です。1517年10月31日、マルティン・ルターが「95箇条の提題」を発表しました。当時の教会が資金集めのためにも行っていた、それを買えば罪が許されるという贖宥状（しよくゆうじょう）—— いわゆる免罪符 —— の販売について、ローマ教皇に公然と異議を唱え、聖書のみ信仰のよりどころを求めねばならないと主張しました。これが「ルターによる宗教改革」の始まりです。この結果、キリスト教界は改革を迫られることとなります。

「改革」とは、「従来の制度を改めて、よりよいものにすること」という意味の言葉です。根本にある基盤は継承させたまま、そのうえで大幅な変化・改良をもたらそうとするものです。

イエスも、旧約聖書に書かれていることなどを否定・排斥するのではなく認めたいうえで、伝統や慣例通りではない新しい発言をしていました。

そういった意味においては、天の国と地上とに大きな変革をもたらしたイエス・キリストは、「天と地の改革者」だったとも言えるのではないのでしょうか。

さて、本日の福音書で、ヨハネという人物について言及されています。この洗礼者ヨハネとは、イエスに洗礼を授けた人物であり、イエスの道備えをし、イエスの先駆者の役割をした存在です。本日の福音書は、イエスが洗礼者ヨハネについて語る次の言葉から始まります。

「彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている」（マタイ 11:12）。

「彼」とは、洗礼者ヨハネのことです。このイエスの言葉は謎に包まれており、様々な解釈がなされてきました。ローマ・カトリック教会はこの箇所を「天国は暴力で攻められ」と訳し、ルターも「天国は暴力に悩む」と訳しています。これらの言葉は、天の国に敵対する力が、天の国を滅ぼそうとしているとも受け取れるかもしれません。

ですがルターは、そういったこととは違う逆説的な解釈をしています。それは「天国が暴力に悩むということは、人々がみ言を強烈に愛し、生命財産のすべてにまさってみ言を選びとることに他ならない」というものです。

ヨハネが悔い改めについて人々に語り、イエスが天の国について語り始めて以来、神の御言葉に心を開いて救いを求め、御言葉を激しく愛する者たちが、信仰をもって天の国を攻めているということです。

それは、たとえば言うなら、自己のうちに罪と闇を抱えながら、神の国に心を開き始めた者たちが、何とか救われたいという必死さで、船に積まれた宝の山を奪い取ろうとする海賊のようになっていくという感じではないでしょうか。

そして、海賊のように船の中の宝の山を奪い取ろうとする——すなわち天の国を激しく襲い、それを奪い取ろうとすることは、神の国の光を見出し始めた人々の、まだ荒削りな体当たりの真剣さであり、それは罪や悪ではありません。

「天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている」とは、熱烈に神の国を求める者たちによって、天の国が脅かされ激しく揺さぶられているということではないでしょうか。

イエスは洗礼者ヨハネのことを「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである」と言いました（マタイ 11:13）。洗礼者ヨハネは、旧約聖書の預言の最後に位置する者です。

イエスはさらにこう言います。「あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである」（マタイ 11:14）。エリヤとは、旧約聖書を代表する預言者です。マラキ書 3:23 に「わたしは／大いなる恐るべき主の日が来る前に／預言者エリヤをあなたがたに遣わす」と記されています。洗礼者ヨハネが、そのエリヤの再来であることをイエスは人々に公にしました。

またイエスは、当時の子供の遊び歌『笛を吹いたのに、／踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、／悲しんでくれなかった』をたとえにして、「今の時代」について語ります（マタイ 11:16-17）。

この歌の意味は、結婚式ごっこをして笛を吹いてもほかの者が乗ってこないし、お葬式ごっこをしても悲しんでくれないということです。

今の時代は、相手がこのように自分の思いや要求を受け入れてくれないと不満を言い合っている子供たちの姿に似ているとイエスは言ったのではないのでしょうか。

ここで語られている「結婚式」と「葬式」は、対照的なものです。これには意味があり、次のイエスの言葉に繋がっていきます。「ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見る、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う」(マタイ 11:18)。

ヨハネとイエスは、ある意味で対照的な存在でした。ヨハネは非常に禁欲的で、荒野でいなごと野蜜とを食物とし、常に断食に近い生活をしていましたが、イエスは食事や宴会を楽しんだようです。人々は、飲まず食わずのヨハネに対しては「悪霊に取りつかれている」と中傷し、他方で、徴税人や罪人とされる人々とも共に食事をしていたイエスを「大食漢で大酒飲み」だと中傷しました。どちらにせよ批判をし、拒絶して受け入れようとしなかったのです。

ですが、人々から拒絶され、受け入れられないということのみで終わるのではありません。イエスは、こう言います。「しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される」(マタイ 11:19)。

「知恵」とは、「神の知恵」を意味します。神の計画は、たとえ、それが多くの者に拒否されたとしてもやがて実るのです。

本日の説教準備で、私が福音書の中でその考察に最も時間をかけたのは、「天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取ろうとしている」という箇所でした(マタイ 11:12)。

この箇所と向き合っているうちに、この言葉の持つ大きな力を感じました。死が怖くなくなり、生と死を超越して生きることができるような至福感を感じたのです。

恋愛関係などにおいても、熱烈に相手を愛するあまり、相手を脅かし脅威を与えてしまう不調和が生じることがあると思います。

それと同じように、神の国の光を見出し始めた、救いを求めて天の国への門戸を叩き始めたはじめの頃は、熱烈に求め愛するあまり、天の国を脅かし脅威を与えてしまうところがあるのでしょうか。

そして、そんな時期を経ながら、だんだんと人間は、天と真っ直ぐに調和をもってつながることができるようになるのではないのでしょうか。

天の国と私たちは、どちらか一方通行の関係性ではありません。

天の国と私たちは呼応しています。

今年も、後半になってきました。

私たちは、どんな時も天から見守られている存在であることを覚え、喜びと感謝のうちに共に歩んでいきましょう。

お祈りします。

神様、私たちに今日という一日を与えてくださりありがとうございます。私たちが今、この肉体をもって地上で生きることの喜びと共に日々を歩いていくことができますようにお導きください。主イエス・キリストの御名によって、アーメン。

***** 説教ここまで *****

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 31 章 31 節—34 節（新共同訳）

³¹ 見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。³² この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。³³ しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。³⁴ そのとき、人々は隣人どうし、兄弟どうし、「主を知れ」と言って教えることはない。彼らはすべて、小さい者も大きい者もわたしを知るからである、と主は言われる。わたしは彼らの悪を赦し、再び彼らの罪に心を留めることはない。

新約聖書 ローマの手紙 3 章 19 節—28 節（新共同訳）

¹⁹ さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。²⁰ なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

²¹ ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。²² すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。²³ 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、²⁴ ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。²⁵ 神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。²⁶ このように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです。

²⁷ では、人の誇りはどこにあるのか。それは取り除かれました。どんな法則によってか。行いの法則によるのか。そうではない。信仰の法則によってです。²⁸ なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の実行によるのではなく、信仰によると考えるからです。

教会讃美歌 294 番「恵み深きみ手もて」1,2,3 節、337 番「やすかれわがこころよ」1,2,3 節、127 番「さかえに輝く」1,2,3 節、262 番「みんなでパンを分けよう」1,2,3 節、181 番「ここにいます 主なる神を」1,2,3 節。